

# ふるさとの 其の16 誇り

## 南アルプス市にも飛行場があった!! ロタコ (御勅使河原飛行場)

みだいがわらひこうじょう



ハヶ岳にむかってまっすぐにのびる滑走路跡  
中央の方形の区画が滑走路の跡。冬の季節風「ハヶ岳風(やつがたけおろし)」を考慮して、滑走路が配置されています。

ロタコとは第2立川航空廠を示す旧日本陸軍の暗号名で、「ロ」は、イロハのロ、つまり第2を表し、「タ」は立川、「コ」は航空廠をそれぞれ表すといわれています。



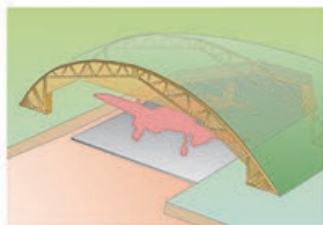
飯野・源村地区施設配置図  
ロタコの施設をあらわした図面【山梨県所蔵】



掩体塚がつくられた山地  
現在ループ橋があるあたりから築山にかけての山の斜面には、記録によれば、かつて50以上の横穴塚が築かれました。



現在も畑の中にひっそりと残る掩体塚跡



掩体塚復元想像図  
掩体塚は、飛行機を隠し、爆風から守る施設で、ロタコの掩体塚は、コンクリート製の基礎に木製の蓋(おおい)をかぶせたものでした。

みることができません。

ロタコの建設工事には、現在の南アルプス市を中心とする金無川西岸地域から、少なくとも一日3,000人の地域の人々が動員されて働いたほか、市内の小中学生や旧制甲府中学の学生などが動員されました。また、危険を伴う横穴塚の掘削には、もっぱら朝鮮半島出身の労働者が

今から62年前、日本有数の扇状地として知られる、御勅使川扇状地の上一現在の飯野・源地区に、旧日本陸軍が地域の人々などを動員してつくった飛行場がありました。

飛行場の名前は、正式には御勅使河原飛行場ですが、もっぱら「ロタコ」という暗号名で呼ばれていました。このロタコは、第2立川航空廠を表すといわれるとおり、東京の立川にあった航空廠を疎開させて、敵から隠すための秘密の飛行場として計画されたものです。

建設工事では、大型機も離着陸可能な長さ1,500m、幅100mの滑走路を中心として、飛行機の格納庫や滑走路と格納庫を結ぶ誘導路、飛行機を隠す掩体塚と呼ばれる施設などがつくられました。

また御勅使川扇状地の西側に沿ってそびえる山の斜面には、物資の保管や飛行機の工場にするために、数多くの横穴が掘られました。

これらの施設は、広大な御勅使川扇状地上の800ヘクタールもの範囲に点在し、現在でもその痕跡をいたるところに

動員されています。

建設工事は、昭和20年3月から本格化し、終戦の日の8月15日まで続けられました。

終戦時滑走路はほぼ完成していたといわれていますが、実際には、一〜二度旧日本軍の飛行機が離着陸したことが確認されているほか、終戦直後、一度調査のため米軍機が降り立った程度で、飛行場が本格的に使われることはありませんでした。まさに幻の飛行場だったといえます。

しかし、現在の果樹地帯に点々と残されるロタコの遺構や、当時の状況を伝える地域の方々の記憶は、かつて南アルプス市にもたしかに、戦争があったのだというのを今に伝える重要な遺跡といえるのです。

※1 航空機の工場、研究施設、飛行場などをあわせた複合的軍事施設

※2 注：現在これら横穴塚は全て埋まってしまい開口しているものはありません